

## アメレ語におけるメタファー

野瀬昌彦

Masahiko Nose

滋賀大学 経済学部 / 教授

言語表現の手段であるメタファーやメトニミーという比喩表現は、毎日の会話やコミュニケーションおよび文学作品などで広く使用されるもので、多くの言語で観察される<sup>1)</sup>。しかし、この種の比喩表現は、意味的に曖昧であったり、論理性を欠いたりする可能性もあり、必ずしも話し手と聞き手の間で必要である表現とは言えない。それにも関わらず、人類は、言葉を使ってコミュニケーションする際、比喩的な表現を多用する傾向がある。とりわけ、日本語や英語などのメジャー言語では、文学作品やことわざなどに多数の比喩表現(メタファーとメトニミー)が存在し、そのような比喩表現自体に関する研究も多数存在する。この点で、メタファーやメトニミーの効果として、文法の語彙や意味を多様化させる手段があり、それは文学作品や詩にも及ぶ。そのため、多くの言語において(言語学においてもそれ以外の分野においても)関連研究が存在する。

本研究では、パプアニューギニアで話される言語のひとつであるアメレ語(英語名: Amele, トランスニューギニア系言語; Trans-New Guinea)を取り上げる。アメレ語がどのようなメタファーを使用しているかを現地にて調査した。ニューギニア島では、とある言語に特別なメタファー表現があることが報告されている(ベリク語(Berik)、McWhorter (2013)、例(2)を参照)。そのため、調査前はアメレ語にも、日本語や英語には見られない興味深いメタファーが存在するのではないかと予想した。

本論の第II節ではメタファーについての先行研究を概観するとともに、アメレ語の紹介をし、第III節

<sup>1)</sup> 実際、メタファーやメトニミーの使用は人類が話す言語で普遍的に存在するものと思われる。

でアメリ語のメタファーのデータを示し、第IV節でその用法に関して議論する。第V節が結論となる。

## II | メタファーに関する先行研究と本研究の目的

本節では、メタファーやメトニミーなどの比喩表現に関する先行研究のまとめと、本研究で取り上げるアメリ語の紹介をする。そうした上で、本研究でのアメリ語でのメタファーの調査とそれに関する考察すべき点を指摘する。

まず先行研究の概観をする。1980年代の研究、Lakoff & Johnson (1980) は認知意味論的な点からの様々なメタファーの枠組みを取り上げたもので、その後の数多くの比喩表現の研究に影響を与えている。なお、Kövecses (2010) では2000年代以降のメタファー、メトニミー研究の成果が記述されている。当然だが、比喩の研究は言語学(特に意味論や認知言語学)だけではなく、文学や文体論の分野でも多数存在する。

日本語の研究では、文学の分野で比喩表現の研究があるが、言語学的な研究としては主として、Lakoff & Johnson (1980) をベースとした研究が多く存在する。代表的なものとして、瀬戸 (1995, 2005) がある。瀬戸は、日本語におけるメタファーの基礎知識や研究の意義を主張し、特に2005年の『よくわかる比喩』では、昔の比喩研究から認知言語学的な分析までの外観をしている。さらに、鍋島(2011)では、メタファーに関する理論的研究を実施し、日本語のメタファーの最新動向を指し示している。メタファーにおいて、例えるものと例えられるものの2つのもを結びつける役割の検討を、認知メタファー理論を適用することで試みてい

る。鍋島(2011)によると、メタファーは以下(1)の3種類に分類される。(1a) ではジョンの性格をオオカミの性格である獐猛さに例え、(1b) では、アメリカ政府をその場所があるワシントンと例えている。(1c) では、プラスチックとはクレジットカードのことであるが、クレジットカードの材料(通常、お金の場合、銅や紙に例えられるだろう)で例えている。このようなメタファー表現では、英語だけではなく日本語や他の言語でも、毎日の生活や書き言葉でも広く観察される。

- (1) Metaphors in general: 鍋島(2011:3-5)
- metaphor: “John is a wolf.”
  - metonymy: “Washington decided to solve the problem.”
  - synecdoche: “Can I pay by this plastic?”

上記のような先行研究により、通言語的および対照言語学的なメタファーやメトニミーによる研究が認知意味論を基盤に可能になり、多くの言語(とりわけヨーロッパやアジアの言語で、そして話者数の多い言語)で比喩表現に関する研究が進展した<sup>2)</sup>。さらには、いくつかの少数言語においてもメタファー研究が進み、いくつかの珍しい比喩が示された。また、瀬戸はメタファーをはじめとする比喩表現は、人間によってのみ使用され、人工知能(AI)などのコンピュータはその種のメタファーをきちんと理解できるわけではないと主張する。他方、McWhorter (2013: 203-204)によると、ニューギニア島の西パプア地域にあるパプア系言語であるベリク語において、以下のようなメタファーが存在するとのことである。

2) 2021年の開催の「世界のメタファーズ」においても、中国語やフランス語のようなメジャー言語のメタファーの研究発表とともに、セルビア語やフィジー語などの比較的マイナーな言語のメタファーに関する研究発表があった。

(2) ベリク語のメタファー (McWhorter 2013: 204)<sup>3)</sup>

(Translated) My gall bladder is really warm today.

文字通りの意味「私の胆のうの器官は今日、本当に温かい」

メタファーが適用された意味「お会いできてうれしいです」

(2) においてベリク語では、初対面のあいさつなどで「お会いできてうれしい」という意味の表現が、極端なメタファー表現で、文字どおりは「私の胆のうが本当に温かい」となるわけである。

本研究では、ニューギニアの特定の言語の比喩表現の使用状況を明らかにしたいと考える。パプアニューギニア地域では、多くの現地語が話されているが、多くの住民は、英語ベースのクレオールであるトクピシン (Tok Pisin) を話す。そのため、本研究では、二言語併用されているトクピシンの比喩に関しても考察することを目的とする。その目的のために、本研究では、パプアニューギニアで話されているアメリ語という言語を取り上げる。アメリ語は、パプアニューギニアの中のニューギニア島の北東部に位置するマダン州で話される言語である (Nose 2020, Roberts 1987)。アメリ語の話者数は6000名弱であり、ほぼ全員がトクピシンとのバイリンガルである<sup>4)</sup>。また、(2) で引用したベリク語とアメリ語とは、同じニューギニア島で話されている言語であるが、両者の距離がとて離れていて、言語接触の可能性はない。

アメリ語は、パプアニューギニアで話されている言語の中では話者コミュニティによって比較的安定して維持されている (著者の観察による)。そういうわけで、アメリ語はいわゆる危機言語ではない。アメリ語はすでにRoberts (1987) による記述文法が存在する。しかしながら、Roberts (1987) の記述文法では、メタファーやメトニミーに関する記述がない。そのため、本研究はアメリ語の比喩表現の調査をするため、現地で調査する必要があった。アメリ語は主として話し言葉として使用され、基本的に書き言葉は存在しない (唯一、翻訳された新約聖書が存在する)。なので、話し言葉として使用されるアメリ語にどのような比喩表現があるか、そして日本語や英語に見られないような珍しい表現があるかどうか注目した。

実際のアメリ語の調査は2018年の8月から9月の数日にかけて実施した。アメリ語が話される村であるセイン村で数人のアメリ語母語話者に、英語とトクピシン、アメリ語を用いて、アメリ語とトクピシンのメタファー表現を調査した (cf. 調査の方法や準備その他に関しては、Vaux and Cooper (2007) を参考にした)。

### III | アメリ語のメタファーのデータ

本節では、アメリ語のメタファーに関する調査で得られたデータを順に紹介する。まず、アメリ語の位置を図1で確認する。下のマダン州の地図で黒枠の部分が、アメリ語が話されている地域である。

3) ベリク語の例については、McWhorterからの引用であるが、これは二次的な引用である。念のため、ベリク語の文法スケッチであるWestrum (1988) をチェックしたが、当該の例文を発見することができなかった。なので、不本意であるが、McWhorterからの引用した。

4) トクピシンは英語ベースのクレオール言語であり、パプアニューギニア全体の公用語の一つ (他の公用語は英語とヒリ=モツ語、Hiri Motu) である。なお、マダン州では、ほとんどすべての人がトクピシンを理解できるが、英語はいわゆる公務員や中流以上の階級に人々によって使用され、ヒリ=モツ語は使用されない。また、ベリク語が話されている西パプア地域は、国としてはインドネシアに属しており、西パプアの住民はトクピシンを話すことはない。

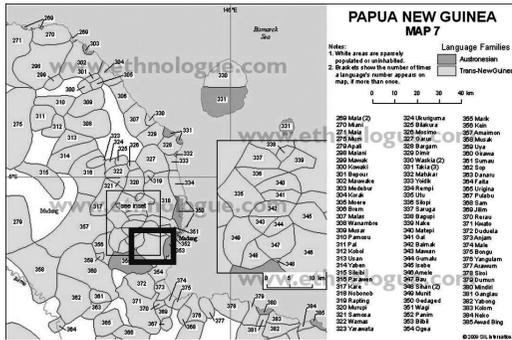


図1: マダン州の言語地図とアムレ語の話されている地域 (四角の黒枠部分: ethnologue.comの言語地図を改変)

マダン州自体は九州地方や台湾島より少し狭い地域であり、その中に270もの言語が話されている。ただし、多く言語が消滅の危機に瀕している上に、それぞれの言語がコミュニケーション可能ではないため、マダン州の人々は共通言語としてトクピシンを使用している。

それでは、アムレ語のメタファーについて順に観察していく。

まずアムレ語の色彩語彙であるが、以下(3)の色が存在する。アムレ語では、青色と緑色の区別がなく、“naqaga”で、青・緑両方を指し示す。

(3) アムレ語の基本の色:<sup>5)</sup>

Golac (赤)、Qail-te (黄)、Senene (白)、Asrec (黒)、Naqaga (青、および緑)<sup>6)</sup>

本調査では、“It (or The man) became red”または、「あいつは黒だ」のようなメタファー表現が可

5) Q音: “gb”:有声の舌背両唇軟口蓋破裂音 (voiced dorso-labiovelar plosive)

6) 日本語でも、青信号や青りんごが本来であれば緑色のものを青色として認識している。アジアから太平洋の地域において、この種の「青色」と「緑色」の混合が存在するのかもしれない。

能なのか尋ね、どういう意味を持つのかということに着目した。結論としては、色のメタファーは存在しないのである。例(4)を見てみよう。

(4) David gor tea.

David red become

「Davidは赤くなった」(単に塗料で赤くなっただけで、怒ったりしない)

上の例文は「人が赤くなった」という文であるが、塗料等で単に赤くなってしまっただけで、怒ったり共産党員になるわけではないとの指摘<sup>7)</sup>があった。他の言語では存在する「赤くなる=怒る」のようなメタファーに関して、無理やり例(5)を作ってもらい検証した。アムレ語母語話者によると、(5)のような文は一応存在するが、微妙な表現であると、アムレ語話者に言われた。そういうわけで、アムレ語では、赤さが怒りを意味することはない。

(5) Gorani gor ac bahic.

angry red have very

「赤い怒りを持っている」

次に、高低のメタファーについて述べる。多くの言語では、上がると気分がアップしたり、下がると気分がダウンしたりするように、感情と関連している。アムレ語には、ohes (高い) / mahana (低い) という語が存在し、その用例を確認した。以下の例(6)と(7)を見てみよう。

7) パプアニューギニアの政治体系には「共産党」的な集団は存在しないが、英語で言うところのcommunistは赤色が代表的であるので、念のため、アムレ語話者に確認した。

(6) price ohes / mahana 「値段が上がる・下がる」

(7) my business ohes / mahana. 「ビジネスがうまくいく・失敗する」

アムレ語では感情の高低はなく、「値段が上がる・下がる」のような目に見えるような高低の表現(6)に拡張可能のようである。ただし、例(7)に示す「ビジネスがうまくいく、失敗する」のような意味拡張は可能であるが、ただしこの場合でも、高低で表現するよりもむしろ、「良い・悪い」の語が好まれるとのコメントがあった。

次に「犬＝警察」のようなメタファー表現が可能かどうかについて述べる。この種のメトニミーはアムレ語でも可能であり、他にも以下のような「水＝アルコール(Wara- alcohol)」も可能である(例(8)も参照)。これらのメトニミーはトクピシンからの類推であると考えられる。

(8) Wa dana (水 人) : 「ビールをいっぱい飲む人」

次に身体部位のメタファーについて見ていく。身体部位が別のものに例えられる可能性について、アムレ語母語話者に尋ねてみた。まず、「頭」についての表現を下(9)に示す。

(9) 頭: iro

iro ac 「リーダー」

jo iro 「家の屋根」

aru iro 「山の頂上」

頭は、集団のリーダーであったり、場所や建物の何らかの上の部分を示したりすることができる。次は、「顔」の例が(10)である。

(10) 顔: ora

jo ora-na 「家の前で」

car ora-na 「車の前の方」

joon ora -na 「村の広場、村の入口」

顔は、場所の前の方であったり、入り口などを指したりする場合に使用される。次に、「目」について以下の(11)に示す。

(11) 目: ameeg

joon ameeg 「監視塔」

ame ameeg 「町の中心、センター」

wa ameeg 「水場」

目は、監視するもの、場所的なものの中心を表すことができる。下の(12)に「口」の例を見てみる。

(12) 口: oni/ona

bag ona 「バッグの口」

joor ona 「ビルム(ニューギニアの伝統的なバッグ)の口」

o qeen bahic 「大声で話す人」(トクピシンでは、bikpela maus bilong em 「大きな 口 所有 彼」)

o ac qee 「あまり話さない人」

o mebahic 「しゃべりがうまい人: very good mouth」

口は、バッグの口のように何か開いたものや、口が達者な人(または話さない人)を指すことができる。例(13)は、「手」についての表現である。

(13) 指・手 : ebeni

Cate ebe, Dog ebe : 単に「猫の手、犬の手」の意味で拡張的な意味はない

金の出どころ・援助 : Solar panel Neret ebe  
「ソーラーパネルはNeretの手による」

アメレ語でebeniは「手」を意味するが、ebeniで手と指両方を意味する<sup>8)</sup>。手については、日本語の「猫の手も借りたい」のような拡張の意味はない。ただし、金の出どころや援助のような意味は有する。次は、「お腹」に関する表現である。

(14) お腹・腹 : Wai

Wai-ni erre ja. おなか-私の、 幸せ 「私は幸せだ」

wai uen-dona お腹 空いている : 「お腹が空いている」

wai ete ac qee お腹 もの 何もない : 「お腹が空いている」

身体部位の最後の「お腹」であるが、お腹は何かを入れる容器としてのメタファーは限定的に可能のようである。このような身体部位のメタファー表現を観察する限り、アメレ語にはベリク語のようなユニークなメタファー表現は存在しないと言える。

その他のメタファーとしては、下(15)のようなものがある。さらにメトニミー表現として、人物を指し示す場合に、その人の出身地や住んでいる場所を呼ぶことがある(例(16))。

(15) アメレ語のメタファーでその他語彙的なもの:

Cabi : 「庭、庭のフェンス」 : 庭で働くので、「仕事」という意味を持つ

Krismas : 「クリスマス」 : 毎年クリスマスがあるので、「歳」という意味を持つ : 30 krismas

Hoo : 「豚」 : hoo ina hoo. 「お前は豚だ」 (アホ、バカだ)

Waag : (機械)、「船」

Man waag鳥(飛ぶ)・機械で、「飛行機」

(16) 出身地が人を指し示すもの:

natnat (mosquito) 「セピック地方からの人」 (セピック地方は湿地が多く、多くの蚊がいるため、このようなメトニミーが使われる)

pig 「ハイランド地方の人」 (ハイランド地方の人の多くが、豚を飼育しているためと考えられる)

Tolai 「島の人」 (ニューブリテン島でトライ語が話されているが、Tolaiの場合、他の島の人を指しても良い)

・人を出身地で呼ぶ

Dagua (セピック州のDaguaから来た人)

Karkar (カルカル島から来た人)

最後に、アメレ語のメタファーに関するまとめを記す。アメレ語は全体的に、メタファー表現が多くは観察されなかった。ただし、調査法、質問の仕方に問題があった可能性がある(これに関しては後で議論する)。しかしながら、身体部位に関してはメタファー表現がわずかに観察された。ただし、基礎的な表現のみで、ベリク語で見られるような特殊なものは観察されなかった。色に関するメタ

<sup>8)</sup> アメレ語の "ebeni" は、ひじり先の部分、つまり、腕、手首、手、指すべてを意味する。

ファーがないのも気になった。また、いくつかのメタファー表現で、“Krismas, pig”などはトクピシンからの借用と考えられる。なので、トクピシン自体のメタファーについても検証する必要があるだろう<sup>9)</sup>。

## IV 議論

本節では、前節までで得られたアメレ語の比喻表現のデータを検討することにする。問題となるのは、アメレ語に色のメタファーがほとんど存在しないのはなぜか、そして身体部位のメタファーも基本的な意味拡張に限られる理由である。加えて、現地でのインタビュー調査の問題についても議論する必要がある。

アメレ語は話し言葉ベースの言語で、書き言葉ではほとんど用いられない。口語での相互のコミュニケーションのため、そしてわかりやすい伝達のため、わかりやすいメタファー表現を利用する傾向がある。また、野瀬(2015)では、アメレ語の味ことば表現を調査したが、アメレ語には、日本語や中国語に観察されるような、豊富な味覚表現が存在しないことが判明している。また、おいしいとおしくないなどの表現が、以下の(17)のように“good/not-good”の関係で示されている。

(17) アメレ語の味覚語彙(野瀬2015)：

Mebahic, mebahic qee (good/not good)：おいしい・おいしくない

Tin ac, tin ac qee：甘い・甘酸っぱい、しぶい

Muug ac, muug ac qee：酸っぱい、辛い、塩辛い・うすい、軽い、あっさり

(17)において、甘さとしぶさが、そして酸っぱさ・塩辛さ・あっさりという味覚表現が同じ語で、ありなしの二分類で表現されている。つまり、アメレ語では、良い・悪い、おいしい・おいしくないという形容詞表現が、“Good/bad”ではなく、“good/not-good”という対立で示される。これは、形容詞の語彙数の少なさとともに、味に関することばが少ない傾向があると考えられる。同様にアメレ語のメタファー表現についても、語彙の少なさやバリエーションの少なさというのは、この形容詞表現の貧弱さが影響しているものと思われる。トクピシンの表現に関しても、話し言葉ベースであることや、英語ベースの語彙の貧弱さという傾向があり、加えて、(異なる現地語を話す者同士による)相互のコミュニケーションのため、わかりにくい(複雑な)メタファーが使われにくいという可能性がある。

結局のところ、アメレ語では、思ったほどメタファーが使用されず、その使用例も、基礎的な意味拡張やトクピシンからの借用であった。その理由や原因として、アメレ語は話し言葉中心の社会なので、書き言葉の文学などが無い。加えて、基本色や形容詞語彙が限られており、“good/not-good”の関係で表現している。毎日のコミュニケーションのために言語が使用され、意味的に複雑であるメタファーを使うメリットがないとの結論が得られた。

最期に、インタビュー調査に関する問題点について議論する(cf. Vaux and Cooper 2007)。付記の部分に、大角(2018)の記述(付記1)と高野(2018)の記述(付記2)を載せた。未記述の言語の文法を記述していく際、効率的にさらに現地の

9) トクピシンには、以下のようなメタファーに基づく表現がある。これは、クレオール言語が、人々のコミュニケーション基盤で、語彙が形成され、かつ、少ない語彙で多くの語を表現できるという利点を利用したものだと言える。

Haus sik (house sick)「病院」

Haus mani (house money)「銀行」

Haus kaikai (house eating)「レストラン」

言葉でない言語(大角のフィールドのニューカレドニアの場合フランス語、本研究のパプアニューギニアの場合英語やトクピシン)でもって実施すると、大角が警告しているように、データを効率的にとれるかもしれないが、そのデータの信頼性がほとんどないというような事態になってしまう。つまり、著者が欲しいデータに関して、必ずしも思った通りの結果が得られていない可能性があるのである。本研究においても例(4)や(5)のデータを集める際、単なる翻訳にならないようかなり注意を払ったが、やはりアમેレ語の話者に何らかの先入観を与えてしまったかもしれない。

また付記2の高野(2018)のアフリカのフランス語圏での観察に示すように、母語を使って調査が可能であれば、メタファーについてももっと多くの例が得られるかもしれない。アમેレ語話者が著者の母語である日本語で自由に尋ね答えられるのであれば、もっとより良いデータが取れるかもしれない一方、これでもなお、媒介言語を使うことで、得られたいデータが取れるかどうかの疑問もある。実際問題、パプアニューギニアは、準英語圏の国でもあるため、英語母語話者(多くはオーストラリア人の研究者)は、英語で調査することも多いようである。本研究では、メタファーの調査において、なるべく慎重に質疑を実施したが、結果的に望んだデータが取れていない可能性もある。

## V | 結論

本研究では、通言語的なメタファー研究の一環として、パプアニューギニアで話されるアમેレ語のメタファーに関して現地調査を実施し、そのデー

タをまとめ、検証した。その結果、以下のことが判明した。

アમેレ語では、色・身体部位などに、当初考えていた以上にメタファーが使用されず、使用されたとしても基本的で単純な意味拡張にとどまるという点である。さらに、トクピシンからのメタファー借用も存在した。このような事実は、アમેレ語が話し言葉主体の言語で、おしゃべりのコミュニケーションにはより複雑な意味を持つメタファーを使用するという動機づけに欠けるからだと思われる。またアમેレ語話者は、アમેレ語とトクピシンとのバイリンガルであり、(主として他の言語話者との共通言語である)トクピシンも日々のコミュニケーションのために使用される。トクピシンも話し言葉ベースの使用であるため、メタファーを多用するとは思えない。となると、メタファー表現が、世界の言語で普遍的に使用されるとの予想は本研究での観察を見る限り、できないのかもしれない。

最後に、現地調査による調査者の問題や調査に使用する媒介言語の問題という可能性も考慮し、今後もメタファー表現の調査を継続する必要性を主張する。

## Notes

本稿は2021年3月16日と17日にオンラインで開催された「世界のメタフェーズー普遍性と言語相対性—」での発表スライド「アમેレ語におけるメタファー」を基にしている。発表の際に、コメントを頂いた方に感謝します。また、アમેレ語のデータについては、Neret Tamo氏およびその家族のみなさんにお世話になりました。

付記1: 大角(2018: 73-74) より、  
「ある時、フランスの大学で博士論文を書いているという(省略) 女性が(省略) やってきた。(中略) 彼女はあらかじめ作った語のリストに基づいて片っ端から聞き、横で助手がノートパソコンに打ち込んでいた。(中略) 「雲のことは何と言う?」。男たちは顔を見合って、口々に「X, X」、いや「Y」、「Zなのでは?」とか言い合う。最後に一番の長老とおぼしき人物が口を開く。「Wだ。それで皆は納得し、「あ、それだ、そう、そう」と言う。」理想的なインフォーマントは稀で、そもそも外国人の私が彼らの間で何をしているのか理解してくれと望む方が無理というものだ。」

付記2: 高野(2018) より、  
「私が人類学者になりたいと言うと、(フランス人の権威的な人類学の先生である) B先生は次のようなアドバイスをくれた。「日本の研究者はよくやっているが、言語に弱いのが欠点だ。人類学者になりたいかと思ったら言語を勉強することだ」(中略) ところがである(中略)、B先生は現地の言葉は何一つ話せないというのだ。じつは彼はフランス語で全部やっているという。(フランス語が堪能な) 現地の優秀な人材を通訳に使い、研究対象である狩猟採集民の人たちに片っ端から訊いていくのだという。自分の母語を駆使できるのだから、どんな込み入ったことでもどンドン訊ける。」

## References

- ◎ Foley, W. A. 2000. The languages of New Guinea. *Annual review of anthropology*, 357-404.
- ◎ Frawley, W. (2013). *Linguistic semantics*. Routledge.
- ◎ Kövecses, Z. (2010). *Metaphor: A practical introduction*. Oxford University Press.
- ◎ Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. University of Chicago press.
- ◎ McWhorter, J. (2013). *What Language is: And what it Isn't and what it Could be*. Penguin.
- ◎ Nose, M. (2016a). The forms and meanings of past tense: A contrastive study of Papua New Guinea. *The Hikone Ronso (彦根論叢)(Working paper of The Economic Society of Shiga University)* 409: 4-15.
- ◎ Nose, M. (2016b). Borrowing temporal expressions in New Guinea languages: a contrastive study of loanwords. *Tohoku Studies in Linguistics* 24: 95-104.
- ◎ Nose, M. (2020). Chapter 8: Persons and Address Terms in Melanesia: A Contrastive Study, In: Toru Okamura & Masumi Kai, (eds.). *Indigenous Language Acquisition, Maintenance, and Loss and Current Language Policies*, Hershey, Pennsylvania, IGI Global.
- ◎ Roberts, John. R. (1987). *Amele*. Croom Helm.
- ◎ Taylor, J. R. (2003). *Linguistic categorization*. Oxford University Press.
- ◎ Vaux, B., & Cooper, J. (2007). *Linguistic field methods*. Wipf and Stock Publishers.
- ◎ Westrum, P. (1988). A Grammatical Sketch of Berik. *Irian* 16: 133-187.
- ◎ 大角翠. (2018). 『言語学者のニューカレドニアメラネシア先住民と暮らして』、大修館書店。
- ◎ 瀬戸賢一. (1995). 『メタファー思考. 意味と認識のしくみ』。講談社現代新書
- ◎ 瀬戸賢一. (2005). 『よくわかる比喩: ことばの根っこをもっと知ろう』。研究社
- ◎ 高野秀行. (2018). 『間違う力』。角川新書
- ◎ 鍋島弘治朗. (2011). 『日本語のメタファー』。くろしお出版。
- ◎ 野瀬昌彦. (2015). ニューギニア系言語アメリ語における香料・ハーブの語彙と味覚語彙に関する言語学的分析。「彦根論叢(滋賀大学経済学会紀要)」405号: 46-57.

## Metaphors in Amele, Papua New Guinea

Masahiko Nose

Some languages spoken on New Guinea Island have unique metaphorical expressions. This study investigated metaphorical expressions in Amele, one of the New Guinea languages spoken in Papua New Guinea. However, as a result of interviews with Amele speakers, it was found that Amele has no complex metaphorical expressions but only basic metaphorical expressions for body parts and colors. This observation may be because Amele is a spoken language spoken in daily life and thus does not use such a roundabout method as metaphoric expressions.

In this study, the author conducted a field survey of metaphors in Amele spoken in Papua New Guinea as part of our research on cross-linguistic metaphors and compiled and verified the data. As a result, the following findings were made, as in (1)-(3). As much as initially thought, Amele language does not use metaphors for colors and body parts, and when they are used, they are limited to primary and straightforward semantic extensions.

(1) David gor tea.

David red become-past

“David became red”(simply reddened by paint, it does not mean “becoming angry”)

(2) “head”: iro

iro ac “leader”

jo iro “roof of the house”

aru iro “summit of the mountain”

(3) “eye”: ameeg

joon ameeg “lookout tower”

ame ameeg “centrum, center of the town”

wa ameeg “water place”

In addition, there was some borrowing of metaphors from Tok Pisin.

(4)

Krismas: Christmas (since there is a Christmas every year, it means “age”)

30 krismas “30 years old”

Haus sik (house sick) “hospital”

This type of borrowing in (4) may be because Amele is a predominantly oral language that lacks the motivation to use more complex metaphors for chatty communication. Tok Pisin, which is bilingual, is also a multilingual Papua New Guinea language for daily communication. Since Tok Pisin is also a colloquial-based language, it is unlikely that it makes extensive use of metaphors. Therefore, it may not be expected that metaphorical expressions are used as universally as one might expect.

Finally, considering the possibility of a researcher’s problem in the field survey, we argue that it is necessary to continue the investigation of metaphoric expressions in the future.